

北海道浮魚ニュース

平成 25(2013)年度 18 号

2013 年 9 月 26 日

道総研 釧路水産試験場

ホームページ

<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/central/section/shigen/ukiuo/indexhtm>

◎平成 25 年度オホーツク海サンマ漁況見通し

北海道立総合研究機構水産研究本部釧路水産試験場・網走水産試験場および独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所・北海道区水産研究所が協議を行い、9 月 25 日に「2013 年(H25 年)オホーツク海沿岸におけるサンマ漁況の見通し」を発表しましたので、内容を要約してお知らせします。

【漁況見通し】

- ① 来遊量 : 来遊量は昨年よりも少ない
- ② 来遊時期 : 北海道沿岸域への来遊は 10 月中旬以降

1. オホーツク海で漁獲されるサンマの回遊 (予備知識)

例年オホーツク海で漁獲対象となる魚群は中型・小型魚が主体で、この群は7月から8月に北方四島の太平洋側から移入するものと考えられています。

従って、7月から8月に太平洋海域に分布する中型・小型魚の分布量が多いことが前提条件となり、さらに北方四島海域の表面水温が10℃以上であれば、オホーツク海への来遊資源量は多くなると考えられます。オホーツク海に回遊したサンマは、8~9月にはオホーツク海の中南部海域に広く分布します。9月以降には海水温の低下にともない、宗谷暖流域の比較的水温の高い(10℃以上)北海道沿岸域へと移動し、漁場が形成されます。

2. 来遊資源量

・6~8月の太平洋における中型・小型魚の分布量

東北区水産研究所が今年の漁期前(6~7月)に実施した中層トロール調査結果によると、東経162度以西(日本近海)では大型魚と小型魚が主体で、これより東方では大型魚が多かった。太平洋全体の資源尾数は昨年よりも多く(昨年の116%)、大型魚が主体で小型魚混じりでした。オホーツク海へ来遊すると考えられる東経162度以西に分布する中・小型魚の資源尾数(25.9億尾)は、昨年(2.8億尾)よりも多くなっています。また、本年7~8月の太平洋海域(主に東経154度以西)におけるサンマ棒受け網の漁獲物は大型魚が67%であり、中型・小型魚は33%でした。中・小型魚の推定漁獲尾数は0.1億尾と推定され、昨年(0.6億尾)よりも少なく、1996年以降最も少ない値でした(図1)。今年とは昨年同様、道東海域への来遊が遅れており、9月中旬においても未だ道東海域での漁場形成がありません。

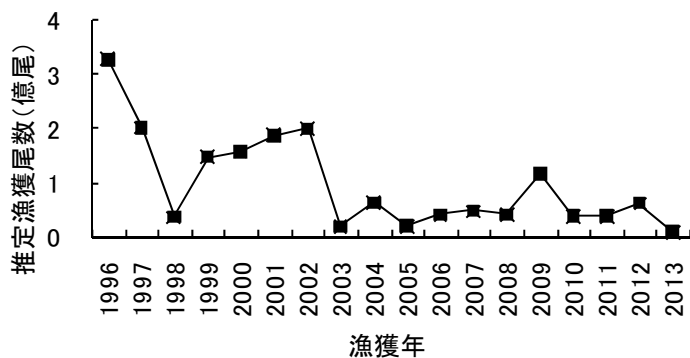


図1 太平洋海域における中型・小型サンマの推定漁獲尾数(8月下旬まで)

※魚体説明：特大魚(体長32cm以上)、大型魚(29-31cm台)、中型魚(24-28cm台)
小型魚(20-23cm台)、ジャミ(20cm未満)

・オホーツク海へ回遊する海況条件

7～8月の北方四島海域における表面水温が高い（10℃以上）年には、サンマがオホーツク海へ回遊する条件が良好であると考えられています。今年の7月中旬から8月下旬の北方四島海域の表面水温は、ほぼ全域にわたって10℃以上の水に覆われていました。従って、今年の太平洋からオホーツク海へ回遊する海況条件は、7月中旬以降、好適であったと考えられます。

3. 北海道沿岸域への来遊時期

紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の間には、週間平均表面水温の年最高値が17℃以上の年に限れば、水温が高い年ほど初漁日が遅くなる傾向が見られます（図2）。

今年9月中旬までの週間平均表面水温の最高値は、8月第4週の18.9℃でした（図2）。これは昨年よりも0.1℃高い値でした。また、この水温を過去の初漁日と水温の関係に照らし合わせると、初漁日は10月中旬と考えられます。

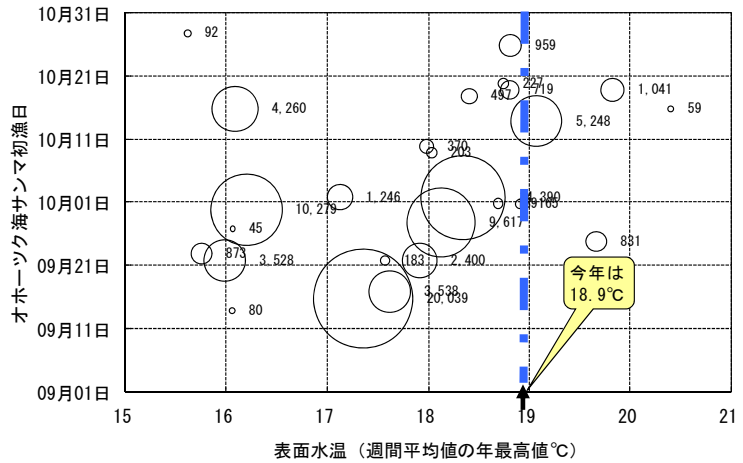


図2 紋別沖の週間平均表面水温の年最高値とオホーツク海におけるサンマ初漁日の関係

表面水温は北緯44～45度、東経143～144度の海域
 図中の数字は漁獲量（トン）を示す
 「○」が大きい程漁獲量が多い

以上をまとめると、サンマの中型・小型魚の資源量は昨年よりも多いものの、日本近海の太平洋海域への来遊状況を見ると、来遊時期の遅れと来遊量の減少により、その漁獲尾数(0.1億尾)は1996年以降最も少ない値で推移しています。本年は、海洋環境は好適であったものの、漁獲の主対象となる中型・小型魚の来遊量が非常に少ない状況にあります。よって、オホーツク海沿岸へのサンマ来遊量は昨年よりも少なく、またその来遊時期は10月中旬以降と考えられます。

4. その他

オホーツク海で操業する棒受け網船の多くは太平洋から回航してくるため、オホーツク海における漁獲量は、来遊資源量が十分ならば、この回航隻数と操業期間、すなわち延べ操業隻数に左右されます。また、9月中旬・下旬の道東太平洋の漁況が良好である年はそこで操業を続けるため、オホーツク海への回航隻数は少なくなる傾向にあります。このため、この時期の道東太平洋の漁況がオホーツク海の漁獲量を決定する要因の一つになっています。今年の道東太平洋海域の漁況をみると道東沖合での漁場形成が遅れており、この状態が続けば、オホーツク海へ回航する漁船が多くなると考えられます。

(釧路水産試験場調査研究部, TEL:0154-23-6222, FAX:0154-23-6225)